

研究主題

学びの価値を実感する生徒の育成

1 はじめに

今後の社会は、グローバル化が進展し、絶え間ない技術革新、社会構造や雇用環境の変化など、先行き不透明で予測困難な時代である¹。新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大により、その傾向はますます加速しており、学校教育に求められることはより多様になってきている²。

このような状況の中、中央教育審議会(2021)³は、我が国の学校教育に求められていることとして「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成すること」を挙げている。VUCA⁴と呼ばれる時代において、学校教育は自分自身や社会全体のウェルビーイング⁵を高めることができる資質・能力を伸ばしていくことが求められているのである。

では、学校教育において、前述した資質・能力を育成する上で最も大切なことは何だろうか。

多様な答えが予想されるが、本校では、子供が学ぶことを「楽しい」、「嬉しい」と感じ、自分なりの学びの価値を実感していくことだと考えた。これからの時代に求められる資質・能力の育成のために、さらにはその先の学校教育においても学びは存在する。だからこそ、そもそもの「学び」という営みを大切にしたい。子供たち一人一人が、授業を通して「学んでよかった」と感じることができ、その思いが学習意欲や自己肯定感、ひいては豊かな人生や持続可能な社会の創造につながることを目指して研究主題を設定した。

2年次となる今年度は、昨年度の成果と課題を踏まえ、研究主題実現のための考え方や手立てを整理し新たな実践を行っていくことにした。

2 主題設定の理由

(1) 教育界における動向から

中央教育審議会(2021)⁶は、「令和の日本型学校教育」として、これまでの日本型教育のよさを受け継ぎ、学習指導要領を着実に実施しながら、一人一人の子供を主語にする学校教育の実現を目指し

¹ 社会を創る自立した生徒の育成、茨城大学教育学部附属中学校、茨城大学教育学部附属中学校研究紀要第49集、2022

² 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)、中央教育審議会、2021

³ 2と同じ

⁴ 「Volatility: 変動性」「Uncertainty: 不確実性」「Complexity: 複雑性」「Ambiguity: 曖昧性」という、四つの単語の頭文字から成り、ビジネス環境や市場、組織、個人などあらゆるものを取り巻く環境が変化し、将来の予測が困難になっている状況を意味する造語

⁵ 心身と社会的な健康を意味する概念。満足した生活を送ることができている状態、幸福な状態、充実した状態などの多面的な幸せを表す言葉。瞬間的な幸せを表す英語「Happiness」とは異なり、持続的な幸せを意味する。

⁶ 2と同じ

ている。では、一人一人の子供を主語にする学校教育とはどのようなものだろうか。

同答申においては、「令和の日本型学校教育」の構築に向けた取組の重点、改革の方向性などとともに、「個別最適な学び」と「協働的な学び」というキーワードを挙げている。

「個別最適な学び」は、子供の適性等に応じた教材等を柔軟に提供していく「指導の個別化」と子供が異なる目標に向けて学びを広げていく「学習の個性化」を目指したもので、個にカスタマイズされた教育の提供を求めたものである。

「協働的な学び」は、「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、探究的な学習や体験活動等を通じ、子供同士で、あるいは多様な他者と協働することで、個の良い点や異なる考え方を生かしていくことを目指したものである。

「個別」と「協働的」は相対するように見える。しかし、「令和の日本型学校教育」では、二項対立に陥らず、どちらのよさも適切に生かしていくことが求められている。このように、一見相対する理念を適切に用いていくためには、教師にとっての学びの価値を明確にし、指導の範囲や内容を精選し重点化していく必要がある。

(2) 学校教育に対する生徒の意識から

2001年（平成13年）に出生した子の実態及び経年変化の状況を継続的に観察した、第17回21世紀出生児縦断調査(2019)⁷によると、学校生活の満足度に関する設問（「ためになると思える授業がたくさんある」、「学校の勉強は将来役に立つと思う」）において、いずれの項目においても「とてもそう思う」及び「まあそう思う」の割合の合計が経年で減少、又は横ばいの傾向にあるとしている（図1）。

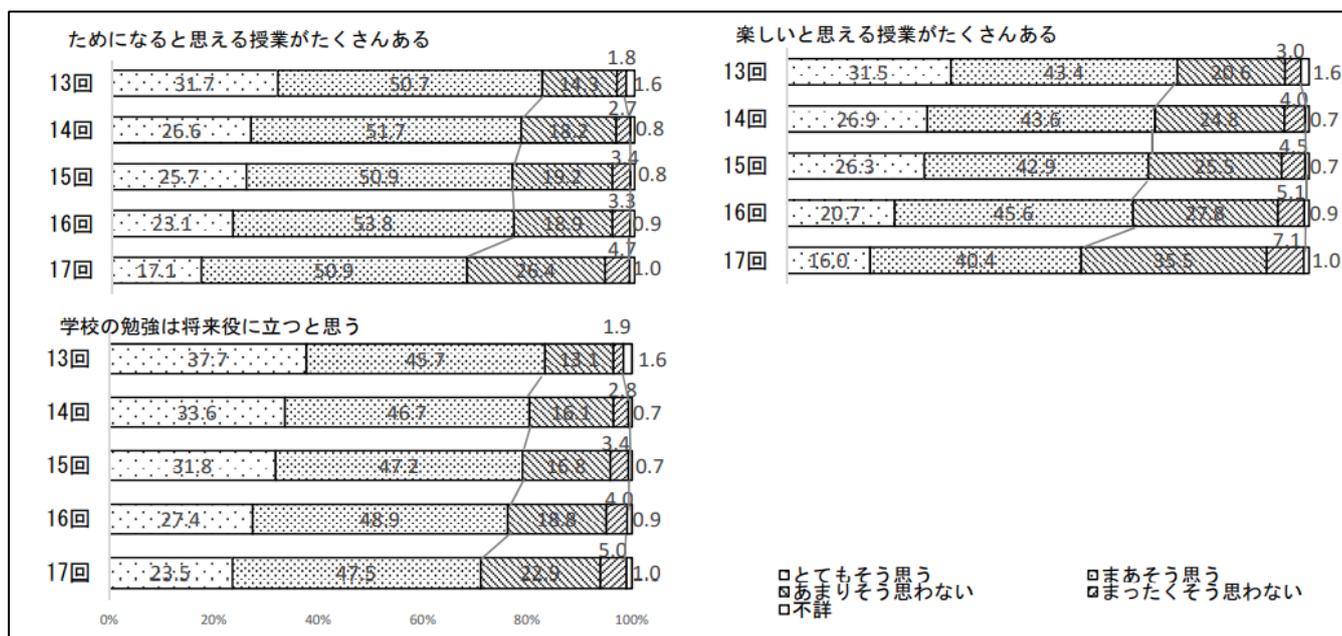


図1 第17回21世紀出生児縦断調査(2019)から抜粋

文部科学省初等中等教育局教育課程課(2021)⁸は、この結果をもとに、高等教育の課題や理数教育の課題を挙げ、STEAM教育等の教科等横断的な学習の充実の必要性を示している。

⁷ 第17回21世紀出生児縦断調査(平成13年出生児)、文部科学省、2019、この調査は、第17回調査時点での子供の年齢は17歳(高校2年生等)であり、第13回(中学1年)～第17回(高校2年等)の経年変化の状況がまとめられている。第13回～第15回が中学校3年間にあたる。

⁸ STEAM教育等の教科等横断的な学習の推進について、第125回教育課程部会資料、文部科学省初等中等教育局教育課程課、2021

一方で、この結果は単に高等教育の課題を指摘したものではなく、生徒が「ためになる」授業や「将来役に立つ」授業であると十分に認識していないことを示唆している。言い換えれば、生徒は十分に学びの価値を実感できていないと考えられる。言うまでもなく、学びの価値は「ためになる」、「将来役に立つ」ものだけではないし、全ての学びが直ちにためになるものになったり、全ての学びが直接に将来役に立つものになったりするわけでもない。しかし、雨垂れが石を穿つように、学びの積み重ねが豊かな人生につながっていくものと考えられる。

つまり、生徒が能動的に学びに向かっているようにするには、生徒一人一人が自分なりの学びの価値を実感すること、そして教師がそれらを見取り、適切に評価し、賞賛したり、助言したりすることが必要である。

(3) 本校生徒の実態から

令和3年度全国学力状況調査質問紙調査（2021）の本校第3学年生徒における質問紙調査の結果（表1）によると、総合的な学習の時間、学級活動における話し合いの時間、特別の教科道徳の授業における質問に対して、「当てはまる」とした生徒はいずれも全国平均より大幅に高い。また、各教科で学んだことを生かしながら自分の考えを作り出すことについても肯定的回答は全て全国平均より高い。これは、生徒の資質によるものも考えられるが、これまでの本校の取組の有効性が示唆されるものである。

表1 令和3年度全国学力状況調査質問紙調査（2021）の本校第3学年生徒における質問紙調査の結果より抜粋

	当てはまる		どちらかといえばあてはまる	
	本校	全国	本校	全国
総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか。	60.6	28.3	31.7	41.9
あなたの学級では、学級生活をよりよくするために学級活動で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていますか。	59.2	28.2	34.5	45.5
道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいますか。	70.4	48.4	22.5	37.3
各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめたり、思いや考えをもとに新しいものを作り出したりする活動を行っていましたか。	39.4	18.0	42.3	41.4
1、2年生のときに受けた授業は、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていましたか。	28.9	23.7	51.4	50.8

(%)

一方、「1、2年生の時の授業が自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていましたか。」という設問に対しては、全国平均と同程度になっているなど、相対的に低くなっている。このことから、本校生徒は、教え方、教材、学習時間などが自分に十分に合っていないと感じていることが分かる。

ところが、本校第3学年生徒の一部に予備調査として質問紙調査を行い⁹、「本校の学びでどのような力が高まったと思いますか」とい

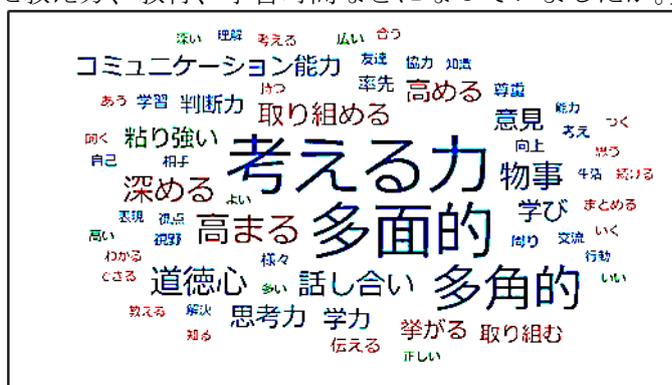


図2 本校3年生を対象にした予備調査の結果

⁹令和3年度3年生57名に対し、令和4年2月に実施。全生徒に実施する予定であったが、感染症拡大防止のための学年閉鎖により、一部への実施となった。今後はこれをもとに1、2年生に実施予定。

う質問の自由記述をユーザーローカル社の Ai テキストマイニングにてワードクラウド（スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示するもの）を抽出したところ、**図 2**のようになった。これによると、スコアの高い単語として、「考える力」、「多面的」、「多角的」、「コミュニケーション能力」、「思考力」、「学力」、「判断力」、「道徳心」などの名詞が、「深める」、「高まる」、「高める」などの動詞が挙げられていた。これらの単語は、本校（学校）でめざしている力が学校教育で身に付いていることを示唆している。

つまり、本校生徒は、学校での学習は十分に自分に合っていないと捉えている一方で、「考える力」、「多面的」、「多角的」、「コミュニケーション能力」、「思考力」などの資質・能力は身に付いていると感じているのである。

なぜこのような現象が起こったのか。前述の令和 3 年度全国学力状況調査質問紙調査における「学校の授業以外で勉強している時間」から読み解いてみる。「学校の授業以外に勉強している時間」が平日 2 時間以上である生徒が 80%以上、土日が 3 時間以上である生徒が 66%と、いずれも全国平均より 35%以上高い（表 2）。また、「塾で進んだ内容を教わっている」という生徒は 47%と全国平均より 28%高い。

表 2 令和 3 年度全国学力状況調査質問紙調査（2021）の質問紙調査本校 3 年生の結果より抜粋

	3 時間以上		2 時間以上	
	本校	全国	本校	全国
学校の授業時間以外に、1 日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか。	26.8	12.4	53.4	29.4
塾で進んだ内容を教わっている	66.2	27.1	20.4	26.6

このことから、考える力の高まりを感じているが、学習は十分に自分に合っていないという現象は学びに対する意識の問題によるものと考えられる。我が国の学校教育が求めている「自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成する」という考えと、生徒が求めている「試験で高い点数を取りたい」「志望する高校に進学したい」という思いには、学びに対する意識の差が見られる。

ところで鈴木(2020)¹⁰は、「(学習塾が学校教育の) 両者の教育の在り方が違うからこそ、学習塾が学校教育の補完となり、学校は学習塾とは異なる『本来的な教育』を追求できる」ことを根拠に、学校と学習塾の教育の在り方に対する認識の違いを指摘している。この指摘によると、学習塾での学びは、学校の補完としての役割を果たしていると考えられることができる。

学習塾は本校生徒が望んでいる教育を提供している。だからこそ、学校は生徒に、試験の点数や志望校合格以外の、より豊かな学びの価値を実感させていく必要がある。

(4) 前研究主題の成果と課題から

本校前研究主題「社会を創る自立した生徒の育成」においては、一人一人の自立を促す学び、社会への参画・貢献を促す学び、内省（自己探究・自己更新）を促す学びという手立てを設定し、各教科だけではなく、学校の教育活動全体を通じて研究・実践を進めてきた。また、社会を創る自立

¹⁰ 「学校と学習塾の関係」の特徴と課題-社会教育研究によって拓かれる新たな地平-、鈴木繁聡、東京大学生涯学習基盤経営研究 第 45 号、2021

した生徒を育成するために必要な「各教科等において共通に育む資質・能力」及びそれらと各教科等での学習の相関を示す「資質・能力相関図」を作成し、それぞれの単元・題材に生かしてきた。そして、各教科等及び教育活動全体を通して学びを促す手立てを講じていくことで、生徒はその資質・能力を伸長させることができ、社会をつくる自立した生徒の育成につなげることができるということを明らかにした。

同時に、次の三点の課題が示唆された。自己肯定感を育む支援体制をより充実させること、探究的な学びを行うための十分な機会や時間を確保するためのマネジメントを行うこと、協働的な学習が充実するような手立てを講じること、の三点である。これらの課題を本研究主題と結び付けて考えると、第一に生徒が学びの価値を実感できるような支援を充実させることで自己肯定感を育むことができるかと予想される。第二に、生徒が学びの価値を実感できる授業づくりを目指すためには、探究的な学びを行うための機会や時間のマネジメントが不可欠である。また、協働的な学びを充実させることは、そのまま令和の日本型学校教育に求められていることでもある。このように、前研究主題で明らかになった課題は、これまでに述べてきた主題設定の理由と共通しており、「学びの価値を実感する生徒」を育成していくことは研究のつながりの側面からも妥当性があると言える。

(5) 過去の研究や他校における先行研究から

類似の先行研究について、本校では1999年度から3年間、「学びの価値を求めて」という研究主題を設定し、他者との関わりを通して、生徒が学ぶことの価値や意義を求めていく研究・実践を進めてきた。それから20年以上経過し、学習指導要領の改訂も2度経過後、これまでに述べたような課題が生じている。改めて学びの価値について問い直し、生徒と教師で共有していくことが必要である。

また、他校における類似の研究として、岡山大学教育学部附属中学校(2021)¹¹が、「学びの意義を理解し、自ら学び続ける生徒を育成するカリキュラム・マネジメント」という研究主題のもと、教科等横断的なカリキュラムの構築を目指した基盤整備等を行っている。岡山大学教育学部附属中学校の研究とは、学びの意義に着目するという部分では類似しているものの、そのアプローチは異なっていることから、別に研究が必要である。

以上(1)～(5)より、学びの価値を実感する生徒をどのように育成していくかということについて、課題として挙げられた点を手立てとして講じながら明らかにしていくことが必要であると考え、本研究主題を設定した。

なお、茨城大学附属学校委員会(2003)¹²は、茨城大学教育学部附属学校園の設置目標の一つとして、「茨城県内外の教育機関に対して広く研究成果を還元する」ことを挙げている。また、表3に示した通り、近年の研究主題においても、教育界の動向を注視し、学習指導要領改訂の前後には、その趣旨の具現化を図る授業づくりを行ってきている。そのため、本研究主題においても、研究主題の実現を目指すことは、学習指導要領の趣旨を実現するための学習・指導方法及び評価方法の工夫改善につながることも確認しておきたい。

¹¹ 岡山大学教育学部附属中学校研究紀要第56号、2021

¹² 茨城大学教育学部附属学校園の設置目標、茨城大学附属学校委員会、2003、(<http://www.edu.ibaraki.ac.jp/fuzoku/admis/index.html>、2022年2月25日参照)

表3 本校の2005年度以降の研究主題と概要、学習指導要領との関連

研究主題	概要	学習指導要領等のキーワード
H17 (2005) 「学びのコンピテンス」を高める授業づくり	「確かな学力」を身に付け、社会に貢献しながら個人としてもより良く生きていくための全人的な力をもった生徒の育成をめざす。	2003 一部改訂 ・ <u>確かな学力</u> ・個に応じた指導の充実
H18 (2006) ～ 社会をつくる意欲と力をはぐくむカリキュラムの開発 (研究開発)	「社会の中で生きる自分」という考え方と自らの意思で社会をつくり上げていくという意欲と力を育むマイカリキュラムの運営方法の検討。	2008 改訂 ・「生きる力」の育成 ・言語活動 ・基礎的・基本的な知識・技能 ・思考力・表現力・表現力
H21 (2009) ～ 自ら学びを切り開く生徒の育成を目指す授業づくり	「生きる力」の理念を大切にしながら「 <u>確かな学力</u> 」を育成する授業づくりに焦点をあてる。	
H23 (2011) ～ 学びを織りなす生徒の育成をめざして	学ぶ意欲、他者との「かかわり」、「課題、ガイダンス」を関連付け、学びの主体である生徒が自ら学びを織りなす力を高める授業づくりを目指す。	
H26 (2014) ～ 21世紀を生きるための「教養」を高める学びの創造	「教養」を自己の生き方の基軸となるものと捉え、「生きて働く知識」「見方・考え方、価値観」「表現力・実践力」を相乗的に育んでいく。	2017 改訂 ・資質・能力（学びに向かう力、人間性、知識及び技能、思考力・判断力・表現力） ・主体的・対話的で深い学び ・カリキュラムマネジメント
H30 (2018) ～ 社会を創る自立した生徒の育成	「一人一人の自立」「社会への参画・貢献」「内省（自己探究・自己更新）」	

3 研究のねらい

「学びの価値を実感する生徒の育成」に向けて、各教科等及び教育活動全体を通して手立てを講じ、その有効性を検証する。

4 研究の仮説

各教科等及び教育活動全体を通して手立てを講じていけば、「学びの価値を実感する生徒」が育成されるであろう。

5 めざす生徒の姿と研究主題の考え方

前述の通り、本研究主題は、子供たち一人一人が、授業を通して「学んでよかった」と感じることができ、その思いが学習意欲や自己肯定感、ひいては豊かな人生や持続可能な社会の創造につながることをめざして設定している。本研究主題において育成をめざす生徒の姿は、「学びの価値を実感する生徒」である。では、「学びの価値を実感する」とはどういうことか。以下に、本研究主題における基本的な考え方を示したい。

(1) 「学びの価値」とは

今年度は、学びの価値を「学びによって生まれる肯定的な感情とその要因」と捉え直した。

昨年度は、反町(2018)¹³や坂田ら(2013)¹⁴、本校の過去の研究「学びの価値を求めて」(1999)¹⁵の先行研究を踏まえ、学びの価値を「学びを通して得る肯定的な感情のもととなる、授業者が考える『授業を通して感じてほしい価値』と『子供がもつ世界（経験や価値観、展望など）』が結び付いて生まれる思いや考え」と捉え研究を進めてきた。1年間の研究を通して、成果が得られた一方、学びの価値について「肯定的な感情だけではなく、悔しさなどの今後につながる感情も価値ではない

¹³ 学びの価値を実感する言語活動の充実～育成する資質・能力を明確にした「書くこと」の実践を通して、反町京子、研究紀要第40号、2018

¹⁴ 聖隷クリストファー大学看護学部紀要No. 21、看護大学2年生におけるポートフォリオを活用した授業実践、坂田五月、佐藤道子、石塚淳子、2013

¹⁵ 茨城大学教育学部附属中学校平成13年度公開研究会紀要 学びの価値を求めて

だろうか」、「授業者が考える『授業を通して感じてほしい価値』と実際に生徒が感じた『学びの価値』が結び付かなくても生徒は自分の学びに価値を見出すのではないか」といった疑問が浮かび上がってきた。そこで、1年次の実践を踏まえて、改めて「学びの価値」とは何か、職員による研修を行い、議論を進め、「学びの価値」に対する基本的な考え方を捉え直すことにした。

そもそも「学び」とは、個人的な営みである。同じ時間に、同じ教室で、同じ内容を学んだとしても、学び方や学んだことで身に付く力は一人一人異なる。また、価値についても、ある事物をどの程度好ましく、有用なものと感じるかは、個々人で異なる。したがって、学びの価値とは、既に存在する決められた概念ではなく、学ぶ人と学ぶ対象の相互作用によって発生する概念であり、一人一人異なるものである。そして、学校教育において、それら一つ一つは尊重されるべきである。

「肯定的な感情」とは、満足感や達成感、有用感などを指す。生徒は一つの授業や単元・題材の学びを通して、「楽しかった」、「嬉しかった」、「成長できた」などの感情を抱くことができる。また、うまくいかなかったときでも、「悔しいからまた挑戦したい」などと前向きな感情を抱くこともある。このような感情も、「肯定的な感情」として捉えることにした。

「その要因」とは、「楽しかった」、「嬉しかった」、「成長できた」などの「肯定的な感情」を抱く要因となる事象である。生徒が肯定的な感情を抱くとき、そこには何らかの原因がある。例えば、「思考ツールを使って論理的に結論を導き出せた」という要因から「楽しかった」という感情が生まれ、「プラスチックの性質が分かった」という要因から「嬉しかった」という感情が生まれ、「前は理解できなかったけど今日の授業で分かった」という要因から「成長できた」という感情が生まれるなど、学んで身に付いた資質・能力、学んだ内容や学び方等が生徒の肯定的な感情を生み出すと捉えた。

(2) 学びの価値を実感するとは

前述の通り、「学びによって生まれる肯定的な感情とその要因」が学びの価値である。したがって、「学びの価値を実感する」とは、肯定的な感情とその要因を実感すること、つまり「なぜ学んでよかったと感じたのか」認識することである。本研究では、後述する手立てを通して、生徒が学びの価値を実感することができるよう支援していく。

授業者は、生徒が「なぜ自分は今日の学びを楽しいと感じたのか」、「なぜ自分はこの単元を学んでよかったと思えたのか」など、学びを通して肯定的な感情が生まれた原因を追究していけるように支援していく。

(3) なぜ「学びの価値を実感する生徒」を育成しなければならないのか

学習指導要領（平成 29 年告示）解説総則編（2019）¹⁶の「実感」に関する記述は、評価に関する記述や生徒指導に関する記述の中に見られる。まず、評価の部分では「評価に当たっては、いわゆる評価のための評価に終わることなく、教師が生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、生徒が学習したことの意義や価値を実感できるようにすることで、自分自身の目標や課題をもって学習を進めていけるように、評価を行うことが大切である」と示されている。次に、生徒指導に関する記述の中で、「分かる喜びや学ぶ意義を実感できない授業は生徒にとって苦痛であり、生徒の劣等感を助長し、情緒の不安定をもたらし、様々な問題行動を生じさせる原因となることも考えられる」

¹⁶ 学習指導要領（平成 29 年告示）解説総則編、文部科学省、2019

とするなど、学ぶ意義の実感は自己肯定感と関わることを示唆している。

また、宮崎(2018)¹⁷は、自らの価値の実感についての記述の中で「学校やみんなの役に立っているという実感子どもたちを突き動かすエネルギーの元となっている」、とし自らの価値を実感できる授業づくりについて提言するとともに、我が国の子供たちの自己肯定感の低さについても指摘しており、ここでも価値の実感と自己肯定感につながることを示唆している。

また、学びの価値と学習指導要領の関連として、学びの価値を実感することは、「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力に近いと考える。「学びに向かう力、人間性等」に関しては、児童生徒一人一人が興味や関心などが異なることを前提に、児童生徒が自分の特徴に気づき、よい所を伸ばし、自己肯定感をもちながら日々の学校生活を送ることができるようにすることが重要とされている。学習したことやものを自ら価値付けていく(=学びの価値を実感する)過程で、知識・技能が社会の様々な場面で活用できることに気付いたり、知識・技能を適切に組み合わせ、活用しながら問題を解決していく思考の有用性に気付いたりすることが期待できる。また、メタ認知能力の向上やなぜ学ぶのかという問いに対する自分なりの納得解の獲得が期待できると考える。

これらのことから、学びの価値を実感することで、より一層学習意欲が高まったり、自己肯定感を高めたりできるようになると捉えた。これらは、中央教育審議会(2021)が、これからの日本の教育として描いた、子供が豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることにつながっていく。

6 生徒の実態

令和4年度の1年次の研究を受けて、本校生徒たちに以下のようなアンケートを行った。(令和4年度実施。全学年対象。茨城大学教育学部附属中学校(3年は任意回答)253名回答。)

表4

あなたにとって、テストで(自分の思う)いい点を取ることは、本校の学びにおいてどれくらい重要ですか。			
「重要」 50%	「やや重要」 39%	「あまり重要でない」 9%	「まったく重要でない」 2%

表4では、89%の生徒が、いい点を取ることの重要度について、「重要」または「やや重要」と回答したことがわかる。研究の発端でもある、よりよい点数をとることに学習の意味を見いだしている生徒が依然多いことがわかった。

表5

あなたが「学べてよかった」と実感する瞬間はありましたか。もしあれば、どんな時にそう思ったのか、教えてください。(記述式)
<ul style="list-style-type: none">・自分1人ではなく友達と話し合うことで学びが深められたとき。・難問が解けた時、日常生活と結びつけて考えられた時。学んだことが線になって繋がった瞬間。・興味のあることを知れた時。新しいことを知れた時。・「自主の名門」自主的に学習や行事に取り組むことができること。

表5は、記述式の設定の結果である。「学べてよかったと実感する瞬間」については、キーマー

¹⁷ 「人の役に立つ」等の体験が促す自分の価値の実感、宮崎倉太郎、児童心理2018、4月号

ドとして、「対話による学びの深化」、「日常生活との関連」、「自主的な取組」等を挙げることができる。

表 6

本校で学ぶ価値は、どんなところにあると思いますか。(記述式)
<ul style="list-style-type: none"> ・学年全体が自主的に行動していて、自分も引っ張られて自主的に行動できるようになるところ。 ・話し合いがとても充実していて、コミュニケーション能力を高めるのにとても良い経験になった。 ・毎授業が楽しくしっかり学べた。 ・他の人と関わって考えを深めようとする協調性がある。 ・自分よりも学力が高い人や、考え方が違うさまざまな人と交流することで、切磋琢磨できたり、友達が自分の目標にできたりするところ。 ・みんなの前で発表したり、話したりする機会が多いため、これから社会に出た時に、堂々と発表ができる。 ・グローバル市民科、係活動、学級活動、学校行事など、先生主体ではなく生徒主体で進めるところ。準備や課題の設定、企画など、何をすることも生徒中心に進行するので、非常にやりがいがあるし、他者との共生なども学べるので学べること、できることの幅が広い。

表 6 は、生徒が実感する「本校で学ぶ価値」について、記述式で質問を行った結果である。キーワードとしては、「対話」、「自主性」、「楽しさ」、「協働」等が挙げられる。つまり、生徒たちは、他者との対話、協働をすることやそれによって生み出されること、また、自主性を高めること等に価値を見いだしていると読み取れる。学べてよかったと実感する場面や学ぶ価値についての生徒の捉えも基に、研究テーマにある「学びの価値を実感する生徒の育成」のための手立てを考えていく。

令和 5 年度、入学した 1 年生を含めて、学びの価値についての意識調査を改めて実施した。(2023 年 5 月 2 日実施。全学年対象。387 名回答。)

学びの価値に関するものについての質問を「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」「どちらかといえば、当てはまらない」「当てはまらない」の 4 択の選択式で行った。「当てはまる」と「どちらかといえば、当てはまる」の肯定的な回答割合が 90%以上の設問と割合は、表 7 のとおりである。

表 7 肯定的な回答割合が 90%以上の設問と割合

勉強は大切だ	99.2%
テストでいい点数をとるとうれしい	97.6%
いい高校や大学に入りたい	94.3%
新しいことを知るのが楽しい	90.9%

また、肯定的な回答の割合が 80%以下になった設問と割合は表 8 のとおりである。

表 8 肯定的な回答の割合が 80%以下になった設問と割合

学ぶことを楽しい(おもしろい)と感じる	79.0%
学んだことによって、自分の考え方や行動が変わったことがある	78.5%
学んだことから意味を見いだしたり、価値を実感したりすることがある	74.3%
学習したことを、普段の生活の中で活用できないか考える	66.8%

表 7、表 8 より、「勉強は大切だ」や、「いい点数をとるとうれしい」への関心は高いことに対し

て、「学んだことから意味を見いだしたり、価値を実感したりすることがある」や「学習したことを、普段の生活の中で活用できないか考える」については、低い割合の値を示した。これは、学習の目的が、受験という社会の要請への対応を強く意識していると考えられる。一方、点数に直結する価値の他にも学びの価値はあり、そのことへ意識を向けさせることに課題があると考えられる。学びの価値は多様であると考えられるからこそ、純粋に学ぶことを面白く感じたり、学び自体に価値を感じたりするなど、様々な価値へ視野を広げ、実感できることが大切であると考えた。

また、研究主題でも述べたとおり、「学んでよかった」と学びの価値を実感することは、学習意欲や自己肯定感を高めることにつながると考えたように、自己肯定感に関する設問も行った。「当てはまる」と「どちらかといえば、当てはまる」の肯定的な回答割合は、表9のとおりである。

表9 自己肯定感に関する設問

今の自分が好きだ	63.7%
自分自身に満足している	48.5%

設問によっては、肯定的な回答割合が90%以上のものと比較すると、50%を下回る低い割合であるため、本校の生徒は、自己肯定感が低い傾向にあり、課題がある。

さらに、学んでよかったという自覚と自己肯定感についての相関について調べるために、「自分自身に満足している」という設問と「学ぶことを楽しい（おもしろい）と感じる」という設問について、クロス集計を行い表10のようにまとめた。

表10 「自分自身に満足している」と「学ぶことを楽しい（おもしろい）と感じる」のクロス集計

		学ぶことを楽しい（おもしろい）と感じる			
		当てはまる	どちらかといえば、当てはまる	どちらかといえば、当てはまらない	当てはまらない
自分自身に満足している	当てはまる	27	20	5	2
	どちらかといえば、当てはまる	31	82	14	4
	どちらかといえば、当てはまらない	31	83	28	5
	当てはまらない	10	21	19	4

次に、「学んだことから意味を見いだしたり、価値を実感したりすることがある」という設問と「自分自身に満足している」という設問とについて、クロス集計を行い表11のようにまとめた。

表11 「自分自身に満足している」と「学んだことから意味を見いだしたり、価値を実感したりすることがある」のクロス集計

		学んだことから意味を見いだしたり、価値を実感したりすることがある			
		当てはまる	どちらかといえば、当てはまる	どちらかといえば、当てはまらない	当てはまらない
自分自身に満足している	当てはまる	21	24	7	2
	どちらかといえば、当てはまる	31	73	21	6
	どちらかといえば、当てはまらない	24	82	37	4
	当てはまらない	14	18	17	5

2つのクロス集計から、「面白い」と感じたり、「学んだことから意味を見いだしたり、価値を実感したりする」ことに対して肯定的な回答をしている生徒の方が自己肯定感も高いという傾向が読み取れる。このことから、「面白い」という感情や、学んだことに対する意味を見いだしたり、価値について考えたりすることは、生徒の自己肯定感を高めることにもなると考える。

最後に、「学ぶことを楽しい（おもしろい）と感じる」、「学んだことから意味を見いだしたり、価値を実感したりすることがある」についてクロス集計を行った結果を表 12 のようにまとめた。

表 12 「学ぶことを楽しい（おもしろい）と感じる」と「学んだことから意味を見いだしたり、価値を実感したりすることがある」のクロス集計

		学んだことから意味を見いだしたり、価値を実感したりすることがある			
		当てはまる	どちらかといえば、当てはまる	どちらかといえば、当てはまらない	当てはまらない
学ぶことを楽しい（おもしろい）と感じる	当てはまる	44	48	6	1
	どちらかといえば、当てはまる	40	120	40	6
	どちらかといえば、当てはまらない	5	27	31	3
	当てはまらない	1	2	5	7

生徒たちは、どちらの設問に対しても肯定的な回答をしている割合が多い。一方、学びについて「楽しい」と感じていても、価値の実感には至っていない生徒の数が 40 とあり、学びについて肯定的な思いをもっているが、それが何かという思考までは行っていない生徒も浮かび上がってくる。このことから、まずは、学びが楽しいというような肯定的な実感を求めながら、次に、なぜ肯定的な感情を得るに至ったかの要因を探ることで、学びの価値について気付ける工夫が必要であると考えられる。

7 研究計画

(1) 2年次の方向性

「学びの価値」に迫るための手立てⅠについて4月～9月の前半期に、手立てⅡ及びⅢについて10月～3月の後半期に、授業実践を通して研究していく。

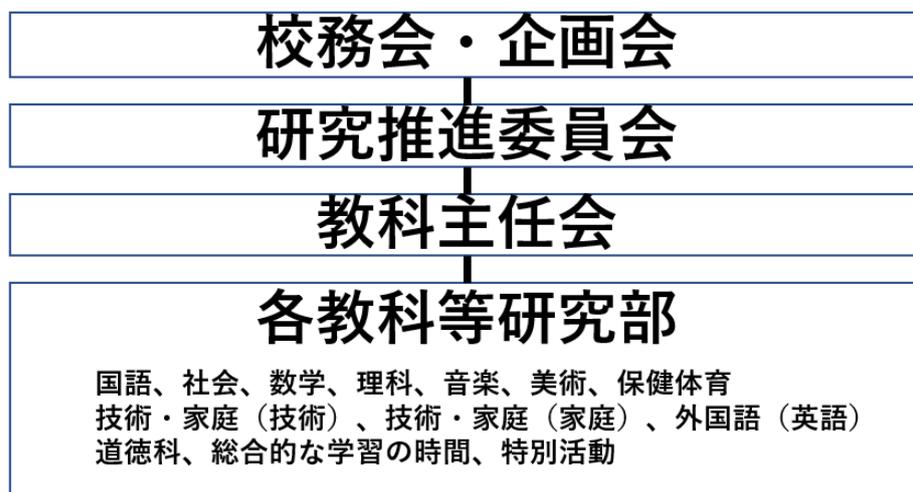
(2) 研究スケジュール

令和5年度 主な研究計画

	研究	学校行事
4月	全体研究の構想 各教科で考える学びの価値の検討 研究基調見直し	前学期始業式 入学式
5月	全体調査（アンケート）の実施 教科等研究基調の作成 指導案原稿の作成	スポーツフェスティバル 教職大学院課題発見実習

6月	授業研究会①（公開：国、社、数、理、家、美、保体、英）	総合体育大会
7月		宿泊共同学習
8月	校内研修（全体：総合的な学習の時間に 係る研修、特別活動に係る研修） 校内研修（全体：総合的な学習の時間に 係る研修）	
9月	全体調査（アンケート）の実施	第Ⅰ期基本教育実習
10月		第Ⅱ期基本教育実習 前学期終業式、後学期始業式 いばら祭
11月	授業研究会②（校内：道徳） 校内研修（特活：中央委員会参観）	音楽コンクール スポーツフェスティバル（1・3年）
12月	授業研究会③（校内：理科・音楽・技術）	英語宿泊研修（2年） スポーツフェスティバル（2年）
1月	令和6年度に向けた準備① 研究紀要原稿の提出 各教科ごとの研究の成果と課題の提出 全体調査（アンケート）の実施	
2月	令和6年度に向けた準備②	
3月	令和6年度に向けた準備③ 研究紀要の発送	県立高等学力検査 修了式

8 研究組織



9 研究の手立て

1年次である昨年度は、学びの価値を実感する生徒を育成するために、各教科、特別活動、特別の教科 道徳、総合的な学習の時間（以下、各教科等）において、それぞれ独自に有効と考える手立てを講じ、検証しながら研究を進めてきた。2年次である今年度は、各教科等で有効だった取組や検証結果をもとに、手立てを右の三つに整理し、実践・検証を進めていくことにした。手立ての有効性については、2年間を通して計画的に検証する。

〈研究の手立て〉

- I 授業者が考える学びの価値を気付かせる工夫
- II 肯定的な感情の要因に気付かせる働きかけ
- III 肯定的な感情を引き出す評価の充実

(1) 授業者が考える学びの価値を気付かせる工夫

- ① 生徒の経験、思いや考えに働きかける学習内容・活動の工夫
- ② 肯定的な感情を喚起する学びのデザイン

生徒の実態で触れたように、本校の生徒は学びの価値の比重をテストの点数に置いている。しかし本来、学びから得られる価値は、その教科の本質に迫るおもしろさや、自己の成長を感じる嬉しさ、学んだことが今後の生活につながる期待感など、多様であるはずだ。本研究では、生徒にこのような多様な学びの価値に気付かせていきたい。そのためには、まず授業者が、準備した教材や学び方について、多様な学びの価値を見いだしていることが大切であると考えた。

そこで、今年度の研究では、授業者が考える学びの価値をはじめ、多様な学びの価値を生徒に気付かせる手立てを① 生徒の経験、思いや考えに働きかける学習内容・活動の工夫、② 肯定的な感情を喚起する学びのデザインの二つに整理した。

① 生徒の経験、思いや考えに働きかける学習内容・活動の工夫

肯定的な感情の要因は、生徒の経験、思いや考えと、学んだことが結びつくことで生まれる。言い換えれば、学んだことと結びつく生徒の経験、思いや考えがないと、肯定的な感情の要因は生まれないことになる。例えば、「プラスチックの性質」について学んだとしても、「プラスチックのごみはなぜ燃やすことができるのに、燃えるごみと分けて捨てる必要があるのだろうか」、「プラスチックにも様々な種類があるんだ」という経験、思いや考えがなければ、「学んでよかった」という肯定的な感情は生まれてこないかもしれない。学びの価値について気付かせるには、生徒の経験、思いや考えを充実させる仕掛けが必要になってくる。

そこで、導入や教材の工夫、学習活動の工夫を通じて、生徒の経験、思いや考えを充実させていきたい。具体的には、生徒の学習意欲を喚起する導入の工夫や問いの精選、体験的な学習活動などを各教科等の授業に取り入れることで、生徒に学ぶことと結びつく経験をさせたり、思いや考えをもたせたりしていく。

② 肯定的な感情を喚起する学びのデザイン

「おもしろかった」、「うれしかった」、「成長できた」、「楽しみになった」など、「学んでよかった」という肯定的な感情は、授業者が生徒に最も抱いてほしい感情である。ハイレベルな内容の授業をしたり、高い資質・能力を身に付けさせたりすることができたとしても、生徒が「学んでよかった」と思えない時間であれば、その授業は生徒の記憶から忘れ去られていくだろう。授業者は、資質・能力を身に付けさせながら、創意工夫を凝らして「学んでよかった」と思わせる授業を作っていく必要がある。

そこで、各教科等で「学んでよかった」という肯定的な感情を喚起できるような学習内容、学び方等を研究していく。肯定的な感情を喚起する学びのデザインの表れが、「各教科等で実感させ

たい学びの価値」「各単元・題材で実感させたい学びの価値」の設定である。授業者は、生徒にどのような多様な学びの価値を実感させたいのか、教科の特性や生徒の実態から考えていく。

具体的には、その教科の本質的なおもしろさに触れる授業や、自己の成長を実感できるような単元構成、他の教科や単元との結び付きに気が付けるような問いの工夫等を教材研究の中で大切にしていきたい。

(2) 肯定的な感情の要因に気付かせる働きかけ

① 肯定的な感情と学びを結び付ける問いの工夫

② 肯定的な感情と学びを結び付け、学びの価値を見出す場面の設定

授業を終えた生徒の中には、「おもしろかった」「うれしかった」「成長できた」「楽しみになった」など、「学んでよかった」という肯定的な感情をもっている生徒も少なくない。しかし、なぜ自分がそのような肯定的な感情をもつことができたのか、自己認識している生徒は多くないと思われる。「なぜ自分が今回の授業をおもしろいと感じられたのか」「なぜ自分は今回の単元で嬉しさを感じたのか」など、自分の学びに対する認識を深めていくことは、学びに関する自己理解につながり、ひいては自己肯定感や有用感に結び付いていくと考えられる。

そこで、今年度の研究では、肯定的な感情の要因を生徒に気付かせる手立てを① 肯定的な感情と学びを結び付ける問いの工夫、② 肯定的な感情と学びを結び付け、学びの価値を見出す場面の設定の二つに整理した。

① 肯定的な感情と学びを結び付ける問いの工夫

授業後の肯定的な感情は、その授業での生徒の学びに起因する。「プラスチックのごみはなぜ燃やすことができるのに、燃えるごみと分けて捨てる必要があるのだろうか」という疑問をもっていた生徒は、「プラスチックの性質」について学んだあと、「学べてよかった」という肯定的な感情を抱くだろう。しかし、多くの場合「学べてよかった」という感情を自分の外部に表出する機会は少ない。それゆえに、「学べてよかった」という感情は言語化されることなく、漠然とした感情として生徒の記憶に残っていくことになる。このままでは、自分の学びに対する認識を深めていくことができず、学びに関する自己理解や、自己肯定感や有用感につながらない。

そこで、各教科等の授業の中で、生徒の肯定的な感情とその要因を結び付ける問いを投げかけていく。例えば、振り返りの記述の中で「おもしろかった」という文があり、その理由が書かれていない場合、コメント等で理由も付記するように促していく。また、授業や単元の終末に本時の感想を友達と共有する活動を設定し、そこで見取れた肯定的な感情に関して、その理由を尋ねていく。これら問いから、生徒が自分の肯定的な感情とその感情を喚起した学びの成果や過程を認識できるようにする。

② 肯定的な感情と学びを結び付け、学びの価値を見出す場面の設定

単元・題材の終末に、各教科等共通で「学びの価値」に関する振り返りを行う。Microsoft Office のアプリケーションである Forms を活用して、その単元の学びを通して生まれた感情と要因について生徒に記入させていく。

すべての教科等において、単元・題材毎に自らの学びの価値を客観視していけるようにする。そして、この振り返り活動によって、生徒が肯定的な感情と学びを結び付けられるようになる場面が確保できると考える。また、すべての教科において同一の形式で聞くことによって、生徒の混乱の減少、検証の際の妥当性、検証結果の信頼性が高まっていくと考える。

(3) 肯定的な感情を引き出す評価の充実

- | |
|----------------------------|
| ① 学びに対するフィードバックの充実 |
| ② 自らの学びを意味付ける多様な振り返りの場面の設定 |

学びの中には、学んだ結果、肯定的な感情を得られないときもある。しかし、たとえその瞬間の学びがうまくいかなかったり、自らの学びを肯定的に捉えられなかったりしても、授業者の働きかけや生徒の認識の再構築によって、肯定的な感情を引き出すことはできると考える。

そこで、今年度の研究では、生徒から肯定的な感情を引き出す手立てを① 学びに対するフィードバックの充実、② 自らの学びを意味付ける多様な振り返りの場面の設定の二つに整理した。

① 学びに対するフィードバックの充実

学習指導要領（平成 29 年告示）解説総則編(2019)¹⁸によると、学習評価について「評価に当たっては、いわゆる評価のための評価に終わることなく、教師が生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、生徒が学習したことの意義や価値を実感できるようにすることで、自分自身の目標や課題をもって学習を進めていけるように、評価を行うことが大切である」と示されている。この文言から、学習評価の充実によって、生徒が学びの価値に気付けるという示唆を捉えることができる。

そこで、生徒の学びに対して多様なフィードバックを行うことで、肯定的な感情を引き出していきたい。鈴木(2021)¹⁹は、効果の乏しいフィードバックについて、①点数を知らせること、②「よくできました」、「がんばりました」などのコメント、③生徒が理解できないコメント、④点数とコメントの組み合わせの4点を指摘している。また、効果的なフィードバックについて、①できるだけ点数で評価結果を知らせることを避けること、②学習の目標に照らして、どこがよくできており、どこが改善を要するかをできるだけ具体的に示すなどの効果的なコメントをすることを指摘している。二宮(2022)²⁰は、「フィードバックが学習改善に結びつくためには、子供の現在の到達度合いが示されるだけでなく、それが目標とどのくらい異なっているのかが質的、あるいは量的に示され、さらにその差異を埋めるために、どのような行動が必要なかが示されなければならない。」「フィードバックが備えるべき質である『学習者にとっての利用しやすさ』とは、教師から子供たちへのフィードバックが、子供たちに理解でき、次なる学習を進める足場（支え）を子供自身が見出せるように提供されているかを問うている。」と指摘しており、鈴木と同様に効果的なフィードバックの在り方について記している。これらの指摘から、生徒にとって効果的なフィードバックを行うことで、生徒の肯定的な感情を引き出すことにつながっていくと考えた。

具体的には、各教科等の授業の中で、声掛けやノート・ワークシートへのコメント等の形成的評価を一層充実させていく。生徒の学習状況を見取り、言葉やコメントでその生徒のよさや進歩を認め、生徒自身が自分のよさや進歩に気付くことができるようにしていく。また、単元の目標に照らして、よくできている部分やその理由、改善すべき部分やその理由をできるだけ具体的に示すことで、これまでの学びの良い点を振り返ったり、これからの学びに対する見通しをもてたりするようにしていく。このようなフィードバックを適宜行い、充実させていくことで、「学べてよかった」という肯定的な感情を生み出していきたい。

¹⁸ 学習指導要領（平成 29 年告示）解説総則編、文部科学省、2019

¹⁹ これだけはおさえたい学習評価入門 「深い学び」をどう評価するか、鈴木秀幸、図書文化、2021

²⁰ 新しい教育評価入門 人を育てる評価のために [増補版]、西岡加名恵・石井英真・田中耕治・二宮衆一他編、有斐閣コンパクト、2022

② 自らの学びを意味付ける多様な振り返りの場面の設定

生徒を評価するのは授業者だけではない。生徒は自分自身の学びを振り返ることで、自分自身を評価し、学習を調整したり学習の見直しをもったりしていく。生徒は自己評価によって、自らの学びを一層意味付けることができる。

そこで、生徒の学びに対して多様な振り返りの場面を設定していくことで、肯定的な感情を引き出していきたい。三宮(2018)²¹は、学習の価値を実感することを学習の有用性の認知と捉えた上で、学習内容に対して価値を実感することに対して重要な要素の一つに、「学習者側も積極的に、『この知識は何に使えるか、どう役立て得るか』を考える習慣をつけること」を挙げている。学習を多様な視点から振り返ることで、学んだことに対する有用性を見いだすことができることを示唆している。鈴木(2021)は、「学校教育の最終的な目標の一つは、生徒が独立した学習者になること」とし、「そのための出発点として、形成的評価を通じて自己評価能力を育成していく意義がある」と論じている。また、自己評価能力の育成方法として、①相互評価の導入、②学習の目標を知ること、③グループでの評価と教師の指導、④作品を作り出す過程で自己コントロールの4点を指摘している。これらの指摘から、生徒が自分自身の学びを多様な方法で振り返って自己評価していくことで、自らの学びを意味付け、生徒の肯定的な感情を引き出すことにつながっていくと考えた。

具体的には、各教科等の授業の中で、生徒が自らの作品や学び方を評価したり、生徒同士がお互いの作品や学び方を評価し合ったりする振り返りの活動を取り入れていく。単元の目標に照らして、生徒が自分自身や友達がよくできている部分やその理由、改善すべき部分やその理由等を考えられるようにしていく。そのための形態として、個人活動で学びを振り返ったり、対話を通して自分や友達の成長や課題を振り返ったり、互いのよさや進歩を伝え合ったりする場面を設定していく。生徒が振り返りを通じた自己評価活動を行い、充実させていくことで、学んだ意味を見だし、「すべてよかった」という肯定的な感情を生み出していきたい。

10 検証の方法

(1) 量的調査

9月・1月に全校生徒対象に意識調査を実施する。5月に行った意識調査との量的な変容を見取ったり、変容の要因を検証したりしていく。

(2) 質的調査

各教科等における単元・題材毎の学びの価値について、記述分析をしたりインタビューを行ったりする。生徒の質的な変容を見取ったり、変容の要因を検証したりしていく。

²¹ メタ認知で〈学ぶ力〉を高める 認知心理学が解き明かす効果的学習法、三宮真智子、北大路書房、2018

11 参考・引用文献

- ・社会を創る自立した生徒の育成、茨城大学教育学部附属中学校、茨城大学教育学部附属中学校研究紀要第49集、2022
- ・「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）、中央教育審議会、2021
- ・第17回 21世紀出生児縦断調査(平成13年出生児)、文部科学省、2019
- ・第125回教育課程部会資料、文部科学省初等中等教育局教育課程課、2021
- ・「学校と学習塾の関係」の特徴と課題-社会教育研究によって拓かれる新たな地平-、鈴木繁聡、東京大学生涯学習基盤経営研究 第45号、2021
- ・岡山大学教育学部附属中学校研究紀要第56号、2021
- ・茨城大学教育学部附属学校園の設置目標、茨城大学附属学校委員会、2003、
(<http://www.edu.ibaraki.ac.jp/fuzoku/admis/index.html>、2022年2月25日参照)
- ・学びの価値を実感する言語活動の充実～育成する資質・能力を明確にした「書くこと」の実践を通して、反町京子、研究紀要第40号、2018
- ・聖隷クリストファー大学看護学部紀要 No. 21、看護大学2年生におけるポートフォリオを活用した授業実践、坂田五月、佐藤道子、石塚淳子、2013
- ・学習指導要領（平成29年告示）解説総則編、文部科学省、2019
- ・「人の役に立つ」等の体験が促す自分の価値の実感、宮崎倉太郎、2018（4月号）
- ・学習指導要領（平成29年告示）解説総則編、文部科学省、2019
- ・これだけはおさえたい学習評価入門「深い学び」をどう評価するか、鈴木秀幸、図書文化、2021
- ・新しい教育評価入門 人を育てる評価のために [増補版]、西岡加名恵・石井英真・田中耕治・二宮衆一他編、有斐閣コンパクト、2022
- ・メタ認知で〈学ぶ力〉を高める 認知心理学が解き明かす効果的学習法、三宮真智子、北大路書房、2018